東京オーングラウンド

GORO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京オーングラウンド

【Ｎコード】

Ｎ２１５３Ｊ

【作者名】

ＧＯＲＯ

【あらすじ】

留美奈とその仲間たちとの日々を書いたものです。

戻った日々（前書き）

書いてみたいと思ったので、書いて見ました。

戻った日々

かつて東京の地下深くに封じられた、世界。アンダーグラウンドでの死闘を終え、地上世界で再びルリ・サラサとチェルシー・ローレックとの再会を果たした留美奈（るみな）の話。

第一話
戻った日々

窓から太陽の光が差し込む朝。

ピピッ、ピピッ、ピピッ、ピピッ、

「う〜〜〜〜ん……後、五分…」

地上世界、アンダーグラウンドでの死闘を終えた留美奈は目覚ましの音を防ぐため布団を頭に被せ二度寝を試みようとしていた。

だが、

ドドドドドドドドドドドドッ！！

「いつまで寝てんのよ！」

物凄い足音を鳴らしながら留美奈の部屋に私服の上にエプロン姿といった金髪の少女が侵入し怒号を上げた。
拳というプレゼントとともに、

「ぐはぁッ！？」

いくら、アンダーグラウンドで鍛え抜かれたといっても不意討ちはきつい。

留美奈は少し痛みにうずくまりながら目に涙を浮かべ呟く。

「き……金髪……」

金髪と呼ばれる少女は元、地下世界にいたチェルシー・ローレックだ。

昨日、屋上で留美奈に拳を入れた女でもある。

とはいえ、いくら何でも人が睡眠中に拳はない。
留美奈はそう思いながら一発言ってやろうかといきよいよく立ち上がった。

そこで留美奈はあることに気づく。

チェルシーが何かに指を差している。

そしてその先には未だ鳴り続ける時計、さらに時間は七時二十分。

普通なら十分余裕がある時間帯なのだが、留美奈は一日十時間勉強しないと進級できないのだ。

……

七時二十五分

「あ、おはようございます。留美奈さん」

慌てて制服に着替え、一階に降りた留美奈にそう声を掛けたのは、生命の巫女と言われる少女。ルリ・サラサだ。

本当ならしっかりと話をしたい所なのだが、昨日は久々の地上世界に疲れてチェルシーとともに寝てしまい、今日は留美奈自身この始末だ。

「おはよう、ルリ！」

留美奈は大雑把にルリにそう返事を返すと、チェルシーが作ったと思われるテーブルの上に並べられた皿に乗るチーズつきの焼けた食パンを口に加えた。

そして、

「いってきまーす！」

留美奈は学校へと、もうスピードで走って行った。

料理

第二話
料理

十時間授業という連続コンボに留美奈はグッタリとした形で家へと帰っていた。

まさか、さらにそれを上回る出来事が起こるともしらずに…

「ただいま～」

留美奈はゆっくりとした動きでドアを開き視線を目の前に向けると、そこにはチェルシーが腰に手をつきながら呆れた顔をしていた。

「だらしないわね、それでも男なの？」

「うるせぇ、第一、十時間も意味不明な授業受けてたら誰だってこうなるんだよ！」

「意味不明ってそれはアンタの頭が馬鹿なだけでしょ」

留美奈とチェルシーの口喧嘩（地下世界では痴話喧嘩と言われていた）はほぼ毎日の日課のようなものだったりもする。

だが、

「チェルシーも留美奈さんも、ご飯食べないんですか？」

襖が開いていた部屋から、ちょこんと顔を出したルリにより中断された。

ルリには留美奈もチェルシーも顔が上がらないのだ。

そうして留美奈は口喧嘩を止め、後は夕食を終え風呂に入って寝るだけ、

だったのだが…

「留美奈さん♪」
「どうした、ルリ？」

留美奈は服を着替えに行こうと階段に足を掛けた時、ルリに呼び止められた。

そして留美奈は耳を疑いたくなる言葉を聞くことになる。

「今日は私が料理したんで、楽しみにしていてくださいね♪」

……料理？

留美奈は何を言った、ともう一度尋ねようとしたが、ルリはニコニコとした表情で立ち去ってしまう。

すると、ルリに変わってチェルシーが留美奈の近くに立ち止まった。

留美奈は小声でチェルシーに話しかける。

「（オイ……）」
「（仕方がないじゃない、ルリ様が自分でやるって）」
「（いや、別に責めてるわけじゃねーよ。ただ……）」
「（一応、料理本を見て作ってたから大丈夫よ。……多分）」

留美奈とチェルシーは沈んだ表情で視線をルリの鼻歌が聞こえる部

屋に向けた。

二十時十分

留美奈は今、ルリの目の前に座っている。
そしてテーブルに広がるのは、餃子、焼売（しゅうまい）、酢豚といった中華料理。

何故、中華料理？

留美奈は難しい表情をしながらルリに視線を向けると…

キラキラと瞳を輝かせていた。さらにその瞳でこちらを見ている。

留美奈はチェルシーに視線を向けた。そして二人は同時に頷くと、箸を持ち、焼売に手をつけた。

パクッ、モグモグ……

「ルリ……」
「何ですか？留美奈さん？」
「これ……焼売だよな？」
「はい♪」

留美奈はルリの笑顔でそう答えるのを見ると、チェルシーに顔を近づけ、

「（金髪……）」
「（……）」
「（焼売って、ケーキみたいに甘かったっけ？）」
「（えっ！？甘いの？）」
「（は？甘いの？って……）」

留美奈はチェルシーのその反応に疑問を抱き、もう一度、焼売に手

をつけた。

（辛い！！！！！！！！！！？）

次の瞬間。留美奈の顔は真っ赤になった。だが、ルリに恥をかかせるわけにはいかない。

留美奈は何とか辛さをこらえて隣にいるチェルシーに視線を向けた。

すると、チェルシーは苦そうな表情をしていた。

そして、その後、

（に、苦い！？）

（す、すっぱい！？）

留美奈とチェルシーはルリの作った、料理に苦しむことになった。

屋根の上で（前書き）

どこかおかしな所があったら教えてください。

屋根の上で

第三話
屋根の上で

二十三時

星空が綺麗な、そんな夜空の下にチェルシー・ローレックはいた。

チェルシーがいるのは留美奈の家の屋根の上。

そしてそこは、留美奈と一緒にルリ様を助けようと言った場所でもある。

「久しぶりね……」

チェルシーはその事が凄く、懐かしい気がした。

するとその時、

ガタッ…

屋根の外側に鉄のはしごが小さく音をたてながら立て掛けられた。

しかし、チェルシーは驚く事はしなかった。代わりにさらに懐かしい感じがした。

そしてチェルシーは誰が登ってくるのかわかっていた。

そう、……それは、

「やっぱり、ここだったか」

浅葱　留美奈だ。

だが、留美奈は何やらぎこちない動きで屋根に登ってきた。

チェルシーはその事に少し疑問に思ったが、

それは、留美奈の片手を見たことで解決した。

片方の手に何かが入ったコンビニ袋を持っていたのだ。

チェルシーは、どうしたの、それ？と尋ねようとしたが、留美奈は手に持ったコンビニ袋から何かを取り出し、チェルシーに放り投げた。

チェルシーはそれをキャッチし、視線を落とすと…

そこには、鮭おにぎりと書かれていた。

二十三時五分

留美奈はチェルシーの隣に座り、二人は同じように星空を眺めていた。

直ぐ側には、ゴミが散乱としている。

すると、留美奈は口を開いた。

「なぁ、金髪」

「なに？」

「その……ありがとな」

……

チェルシーは大きく息を吐く。

「勉強しすぎて頭おかしくなった？」

「違う。昨日の事だよ！昨日の！屋上で俺に渇入れてくれただろ」

ああ…あれね……。チェルシーはそんなことか、と呆れた表情を見せる。

「あれはアンタがメソメソしてたからイライラした……だけ……で……」

だが、チェルシーがそう言いながら留美奈の顔を見た瞬間。
チェルシーの顔から呆れた表情が消えた。

留美奈の目がどこか悲しいような目をしていたからだ。

チェルシーは軽い気持ちでそう言った事に後悔した。
そして、そのまま黙って下を向いてしまう。

しかしチェルシーは、ついほんの一瞬思ってしまった。

私とルリ様、どっちを一番心配したんだろう……

するとその時。

「なぁ、きん……チェルシー」

留美奈は普段の金髪と言う言葉を使わずに、チェルシーの名前を呼

んだ。

チェルシーは突然のことに目を見開き、留美奈に顔を向けると、そこには、

こちらを見る真剣な留美奈の顔があった。

それはたった数分の出来事の筈なのに、チェルシーにはとってはとても長い時間に思えた。

そして留美奈の口が動こうとする。

しかし次の瞬間。

『チェルシー』

チェルシーの頭にルリの顔が浮かんだ。

「さぁーてと！！」

チェルシーは、いきよいよく立ち上がり、

「明日もルリ様を起こさないといけないからもう寝るわ」

留美奈に振り返らずにそのまま屋根から飛び降り、その場から姿を消した。

二十三時十分

チェルシーは今、グッスリと眠る、ルリの側に座っている。

チェルシーは呟く。

「……これでいいのよ……私……」

それはとても小さな声で……

自分に言い聞かせるように……

作戦（前書き）

グダグダです……

作戦

第三話
作戦

土曜日。
昼十二時

「おかしいんです！」

ルリ・サラサは力強く、声をあげた。

そしてルリがそう声を上げる先には、グルグル眼鏡をした少年がいる。

留美奈とともに地下世界で戦った、留美奈の友である、五十鈴銀之助(いすずぎんのすけ)だ。

そして今、ルリと銀之助がいるのは浅葱家から離れた、林の影。

何故、居候の身であるルリはともかく、銀之助がそんな場所にいるのかと言うと、それは数時間前……

ジリィン、ジリィン、ジリィン！

ガチャッ、

『あ！銀之助さんですか？ルリです。ちょっと今から留美奈さんの家まで来てくれませんか？』

銀之助はルリに一方的に電話でそう呼び出されたのだ。

そして言われたまま留美奈の家に行ってみると、門の前で待っていたルリに腕を捕まれ……

結果。今に至るわけだが。

さらにルリの初めの一声がこれときた。

銀之助は何とか頭を整理し、ルリに尋ねる。

「……何が？」

「だから、おかしいんです！！」

「いや、……おかしい、って何がおかしいのか言ってくれないと……」

「あ……ごめんなさい。……実は、チェルシーと留美奈さんの様子がおかしいんです」

「留美奈とチェルシーさんが？」

「はい。……ここ二日、留美奈さんが、自分で起きたり……」

（留美奈……もうルリさんにだらしないイメージもたれてるんだ…）

「それから、いつもは二人とも仲良く話したりしていたのに、ここ

最近は軽く言葉を交わすだけで…」

仲良く？それ口喧嘩じゃ……、と銀之助は一瞬、いつもの二人の口喧嘩を思い出す。

だが、同時に銀之助はここ最近の留美奈の事も思い出す。

どこかいつもより元気がなく、つまらなそうな表情をしていた留美奈を…

すると突然。
ルリは、銀之助に詰めより、

「銀之助さん！」
「は、はい！」
「お願いします！どうか留美奈さんとチェルシーをまた仲良くさせてあげてください！」

銀之助にそう頼みこんだ。

だが、留美奈はともかくチェルシーはとなると、いくら銀之助でも、どうしたら良いのかわからない。

銀之助は頭をかきながら、悩んだ。

すると、その時…

銀之助は朝見たテレビの事を思い出した。

「そうだ……これだ！」

十二時二十分

「遊園地！？」

寝室の布団に寝転がっていた留美奈は嫌そうな顔で銀之助に振り返った。

「うん。留美奈〜、遊園地行こ〜」
「あのなぁ、銀……」

留美奈は布団から起きると、息を吐き、

「何で、俺が男と虚しく、遊園地なんか行かなくちゃあならねぇんだよ！！」

いきよいよく立ち上がった。

「い、いや、これは僕が言ったんじゃなくて、ルリさんが」
「ルリが？」

だが、ルリの名前が出たことにより留美奈はその場で立ち止まる。

「うん、そうなんだ。ルリさん、明日ちょっと用事があるから代わりに留美奈にこのぬいぐるみを買ってきて欲しいって」

銀之助は、ポケットから、携帯電話を取り出し、画面を留美奈に見せた。

そこには、可愛らしいウサギのぬいぐるみが写し出されていた。

留美奈は画面と銀之助を交互に見る。

どうにも怪しい気がしてならなかったからだ。

しかし留美奈は、ルリの顔を思い出し、

「仕方ねぇな…」

頭をかきながら了解してしまうのであった。

一方、とある一室では…

「遊園地……ですか？」

チェルシーがキョトンとした表情でルリに振り返っていた。

「はい♪そこで留美奈さんに何か買ってプレゼントしたいと思って」
「なら、わざわざ遊園地じゃなくても」
「そこにしか売ってないのがあるんです」

チェルシーは、少し迷った。

だが、もうルリを狙う者はいない。

しかし、だからこそ、安堵していいものか…

チェルシーはそう考えながら、ルリの顔を見る。
そこには笑顔に満ち溢れたルリの顔が広がっていた。

もう、考えるのはよそう。
チェルシーはルリを見てそう思った。

そして、

「わかりました、ルリ様がそう言うなら」

チェルシーはルリの頼みを了解した。

遊園地編1（前書き）

連続で書いて見ました。

遊園地編1

第四話
遊園地編1

日曜日
朝十時三十分

遊園地の近くにある平凡な公園で、茶色い皮ジャンと青いジーパンを着た、浅葱留美奈は立っていた。

昨日、銀之助に十時三十分に待ち合わせと言われ、十一月の寒い中、集合場所で未だ待っているのだ。

が、

「銀の奴……全然来ねぇじゃねぇか！！」

時間になっても、銀之助来る気配が全くなく、留美奈は一人公園の中心で突っ立っていた。

しかしも、公園には誰一人として人がいない。

……はぁ～……

留美奈は無償に寂しくなった。あまりの寂しさに近く立つ、鳩の銅像に抱きつきたいぐらいだった。

だが、このまま帰ればルリに会わせる顔がない。

留美奈は深く息を吐いた。

すると、その時。

ザッ

留美奈の耳に足音が入った。

留美奈は、銀之助か！？と直ぐ様その音に振り向き、怒号を飛ばそうとした。

だが、次の瞬間。

留美奈は唖然とした。

何故なら、

そこには…

「アンタ……」

黒いコートに赤いマフラーを着た。

チェルシー・ローレックが立っていたからだ。

その頃、留美奈から離れた草むらの中にルリ・サラサと五十鈴銀之助は隠れていた。

そして二人は双眼鏡で留美奈とチェルシーを覗いていた。

「銀之助さん。チェルシーが留美奈さんに会いました」

「うん、そうだね」

ルリと銀之助は、双眼鏡を目から離し、遠目から留美奈とチェルシーを眺める。

そこでルリは銀之助に振り返り、尋ねた。

「銀之助さん。次は、どうするんですか？」

すると銀之助は眼鏡をキラリと光らせ…

「次は……」

「留美奈の動きしだい♪」

もう一度、双眼鏡で留美奈を見た。

ルリは、ガクッ、っと転けそうになった。

そして場所は戻って公園では、

留美奈とチェルシーは二人揃って近くの銅像付近に、しゃがみ込んでいた。

時間は刻々と過ぎていく。

すると、留美奈はチェルシーに尋ねた。

「なぁ、……金髪」

「……何？」

「携帯とか持ってるか？」

……

その場に再び静寂が漂った。

普段なら、ここで口喧嘩となるのだが、全く、そんな空気にはならなかった。

「あるわよ……」

チェルシーはポケットから携帯を取り出し、留美奈に渡そうとした。

だが留美奈は、

「いや、先に、今から言う番号打ってからくれ」

チェルシーにそう頼みながら番号を言った。

チェルシーは疑問に思いながらも、留美奈に言われた番号を打ち、留美奈に渡した。

すると、留美奈は携帯を受け取ると、顔の前に持っていき、息を大きく吸った。

そして留美奈がそう息を吸う数秒前、

銀之助の携帯が鳴り出した。

画面を見ると、知らない番号が映し出されている。

銀之助は頭を傾げながら電話に出た。ルリも気になって銀之助の携帯に耳を寄せた。

すると、次の瞬間。

「銀！！！！テメー今どこにいやがんだ！！！！コルァァ！！！！！」

「うわっ！？」
「きゃ！？」

留美奈の大きな声が銀之助とルリの鼓膜を刺激した。

銀之助は急いで通話を切る。

ピッ！

……

その一方、チェルシーは耳を抑え、目を見開きながら驚いていた。

何故なら、突然、留美奈が大声で叫び出すのだ。

驚かない者はいない。

流石のチェルシーも、これには怒り、留美奈に一言言わずにはいれなかった。

だが、留美奈は、そんなチェルシーに微笑みながら言う。

「ルリは銀と一緒だ」

チェルシーは、え?、と驚いた表情を見せ、留美奈の顔を見た。

嘘をついている顔ではなかった。

留美奈には、わかっていたのだ。
チェルシーがルリの安否を心配していたことに…

だから、留美奈はあの時、大声で銀之助を驚かせ、ルリが銀之助とともにいるかを確かめたのだ。

元々、予想していた分、それほど驚きはしなかった。

携帯をチェルシーに返した留美奈は、立ち上がると、チェルシーに声をかけた。

「おい、金髪」

チェルシーは未だ茫然としていたが、留美奈の声で目が覚め、顔を上げる。

そして、留美奈は、

「行くぜ、遊園地」

口元に笑みを作りながら、チェルシーを手を引っ張っりながら、走るのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2153j/

東京オーングラウンド

2010年10月9日04時15分発行